

**外国語教育メディア学会(LET)
第76回 (2010年度秋期) 中部支部研究大会**

プログラム

日時：2010年11月28日（日） 10:30-16:50

会場：岐阜聖徳学園大学 羽島キャンパス 教育学部棟
〒501-6194 岐阜市柳津町高桑西1-1

主催：外国語教育メディア学会(LET)中部支部

後援：岐阜県教育委員会

問い合わせ先：

〒487-8501 春日井市松本町1200

中部大学 語学センター

外国語教育メディア学会中部支部事務局 小栗成子

電話：0568-51-6649

メール：支部サイト(<http://LET.lang.nagoya-u.ac.jp>)の「お問い合わせ」

日程

- 10:00 受付 1階ロビー
10:00 展示 7105会議室他
- 10:30 開会式 7108講義室
司会： 村尾玲美（名古屋大学）
主催者挨拶： 尾関修治（LET中部支部支部長／名古屋大学）
開催校挨拶： 口羽益生（岐阜聖徳学園大学学長）
- 10:40-12:00 講演 7108講義室
「“語彙の学び”を科学する：小中高大の連携の視点」
講師： 石川慎一郎（神戸大学）
講師紹介： 杉野直樹（立命館大学）
第2言語の習得において語彙が決定的に重要であることは広く指摘される通りですが、実際の教育現場では、語彙学習はしばしばカリキュラムの外に追いやられ、学習者任せになっているという実態もあります。
「来週までに10語覚えてきなさい」と言うのは簡単ですが、少し立ち止まって考えてみると、「いったい何を覚えさせればいいのか」「どのように覚えさせればいいのか」「そもそも語彙を覚えるとはどういうことなのか」といった基本的な問いにすら、なかなか明白な答えを出せないことに気が付きます。
本講演では、英語の語彙の諸相を俯瞰し、「語彙を学ぶ」という営みをどのように体系化できるか考えてみたいと思います。とくに、35時間実施が目前となった小学校英語から中高大の英語教育への連携の視点をふまえてお話しします。
- 12:00-13:30 昼食・展示
学生食堂でお弁当の販売をいたします。ご利用ください。
- 13:30-15:10 研究発表 7106・7107・7108・7202講義室
(1) 13:30-14:00 (2) 14:05-14:35 (3) 14:40-15:10
- <第1室> 7106講義室
司会：伊藤 高司（名城大学附属高等学校）
石本 葉子（大同大学大同高等学校）
(1) 「生徒・保護者・教師の三位一体を目指した授業実践報告」
伊藤 高司（名城大学附属高等学校）
(2) 「英語と理科のTeam Teachingによる授業実践」
杉山 剛浩（名城大学附属高等学校）

- (3) 「高等学校における英語ディベートの実践報告」
石本 葉子 (大同大学大同高等学校)
伊藤 佳貴 (大同大学大同高等学校)

<第2室> 7107講義室

司会：占部 昌蔵 (長岡工業高等専門学校)
山本 敦子 (小牧市立小牧中学校)

- (1) 「日本人英語学習者の動機減退の理由と時期について-中学校・高等学校の6年間に焦点をあてて-」
占部 昌蔵 (長岡工業高等専門学校)
- (2) 「小学校外国語活動カリキュラム作成についての一考察」
山本 敦子 (小牧市立小牧中学校)
河合 智 (小牧市立篠岡小学校)
- (3) 「中学2年生はどれだけ辞書を引けるのか？」
石井 聡裕 (愛知教育大学大学院生)

<第3室> 7108講義室

司会：天野 修一 (名古屋大学大学院博士後期課程)
宮崎 佳典 (静岡大学情報学部)

- (1) 「日本人英語学習者の単語認知における視覚と聴覚のギャップに関する予備的検討」
天野 修一 (名古屋大学大学院博士後期課程)
- (2) 「英単語並び替え問題における学習者のマウス移動軌跡再現および履歴データ検索プログラムの構築」
宮崎 佳典 (静岡大学情報学部)
佐藤 良美 (静岡大学情報学部4年)
厨子 光政 (静岡大学情報学部)
法月 健 (静岡産業大学情報学部)
- (3) 「イメージを通して考える英語イデオムの実践的授業」
大橋 昌弥 (愛知県立明和高等学校)

<第4室> 7202講義室

司会：伊藤 隆 (名古屋学院大学)
岩城 奈巳 (名古屋大学)

- (1) 「外国語学習者のペアワーク研究におけるデータの分析単位」
伊藤 隆 (名古屋学院大学)

(2) 「音読中心の授業と文法訳読中心の授業が短期記憶に与える効果の比較」

石神 政幸 (岐阜県立長良高等学校)

(3) 「日本人海外子女の英語運用能力プロセスにおける基礎研究」

岩城 奈巳 (名古屋大学)

阪上 辰也 (名古屋大学)

15:20-16:50 シンポジウム 7108講義室

「小中高大をつなぐ語彙指導の実際」

コーディネータ・パネリスト：

高橋美由紀 (愛知教育大学)

パネリスト：小島ますみ (岐阜市立女子短期大学)

後藤信義 (岐阜大学附属中学校)

コメンテータ：石川慎一郎 (神戸大学)

日本の外国語 (英語) 教育は、コミュニケーション能力を育成することが目標とされている。この中でも語彙学習は、すべての校種の中の英語教育で扱われており、コミュニケーション能力の重要な部分を形成している。大学までの英語学習でどのような語彙を身につけなくてはならないかについて、これまでもいろいろな形で提案がなされてきている。

本シンポジウムでは、語彙指導について小学校、中学校、高等学校、大学とそれぞれの校種でどのような語彙指導が適切であるのか、また、実際に学習者の発達段階を考慮してどのような指導が行われているのかを発表する。さらに、それぞれの学校間の連携をどのように図っていくかを総合的に議論し、学習者が豊かな語彙を身につけ自信を持ってコミュニケーションが図れるような展望を示したい。

17:10-18:30 懇親会 1階ロビー

研究発表概要

<第1室>

発表1 生徒・保護者・教師の三位一体を目指した授業実践報告

伊藤 高司 (名城大学附属高等学校)

生徒も保護者も異口同音に「英語ができるようになりたい、なつて欲しい」と言う。その裏側には「良い成績」という意味が含まれているようだが、「良い成績」を切に願っているのは生徒よりも保護者の方である。英語ができる保護者が年を追うごとに多くなり、それに比例して英語学習に関するピリフなどを子供だけでなく、教師にも押し付けてくるようになってきたのも現実である。一方で、大学全入時代を迎え、且つ多種多様な入試形態が存在する昨今では、多くの生徒の関心は目の前の受験だけでなく、生涯学習も視野に入れた英語学習にシフトしてきた。本発表では、面談などで得られた高校生とその保護者の英語学習全般に関する意識の違いをまず示し、生徒には好評であったが保護者からの反発が強かったタスクを幾つか紹介し検証したい。最後にどのようにして保護者の理解を得ることに成功したかを示したい。

発表2 英語と理科のTeam Teachingによる授業実践
杉山 剛浩 (名城大学附属高等学校)

本発表は平成18年度指定スーパーサイエンスハイスクールの学校設定科目「科学英語」という授業の実践報告である。指定年度より生化学の視点からHealthをテーマにし、「どの生徒にも身近なトピック」を念頭に置き、高等学校で学習する生活一般と保健体育教科に相当する分野の読解指導を行ってきた。また、平成22年度は理科系の文献に多用される数字、数式、記号の学習まで幅広く取り組むことができた。特筆すべきは、この科目は開設以来、英語科教諭だけでなく理科教諭との協力により、授業の前半を理科教員からの内容解説、後半を英語科教員による英文読解指導という形で成立させたことであり、英文の背景知識を含んだ上での学習をすることで、理系コースに在籍する生徒の英語学習に対する意識向上を試みた。生徒たちの興味関心がある分野の英文を取り上げることで、今まで以上に学習意欲が向上した。

発表3 高等学校における英語ディベートの実践報告
石本 葉子 (大同大学大同高等学校)
伊藤 佳貴 (大同大学大同高等学校)

本発表は、高等学校における英語ディベートの実践報告である。発表者は、平成22年4月より課外活動において英語ディベートの指導を開始し、学習者の活動状況を記録した。

この活動のねらいは、英語ディベートという新しい学習方法を通して、通常の授業のみでは補うことのできない実用的な英語運用能力を学習者が獲得することである。

具体的な取り組みとしては、岐阜県で毎月開催される英語ディベート講習会に参加し、ディベートの基礎から実践までを学んだ。また学校の課外活動においても、ディベートの練習会を定期的に行った。

本発表では、まず高校生英語ディベートについて概要を説明する。次に、学習者の観察やインタビュー、教師の活動記録などを通し、活動に参加した学習者がどのような問題に直面し、またそれらをどのようにして克服したかについて報告する。そして、これまでの活動を通して得られた指導上の課題や留意点より、今後における指導の在り方について考察する。

<第2室>

発表1 日本人英語学習者の動機減退の理由と時期について—中学校・高等学校の6年間に焦点をあてて—
占部 昌蔵 (長岡工業高等専門学校)

近年、外国語学習における動機付け研究が日本でもよく行われるようになってきている。ただ、日本においては動機減退に関する研究はまだまだ少ないのが現状である。本研究では、日本人英語学習者が動機減退を起こす時期は中学校・高等学校6年間のどの時点なのか、それと、どのような原因が動機減退を引き起こすものとして高いのかを明らかにしようとした。本研究への協力者は、日本の工学系大学に所属する学生と工業高等専門学校4年生(大学1年相当)の計122名である。協力者への質問紙は、先行研究を参考に自由記述欄も加えて作成した。結果、最も動機減退を引き起こす時期は、高等学校1年の時期であることと、その原因として英語自体への関心・学習目的が低くなったことや学習内容・教材が難しくなったことなどが示された。

発表2 小学校外国語活動カリキュラム作成についての一考察
山本 敦子 (小牧市立小牧中学校)
河合 智 (小牧市立篠岡小学校)

来年度から始まる小学校外国語活動の一斉実施に向けて、小牧市外国語活動推進委員会の一員として平成18年度より、カリキュラム作成に取り組んだ。平成20年度には市統一カリキュラムを作成し、昨年度より、市内全小学校5、6年生でこのカリキュラムを用いた授業がスタートした。このカリキュラム作成においては、次の点を重点目標として取り組んだ。

- (1) 児童を中心に据え、担任と児童が学びあう学習形態
- (2) 中学校に繋がる積極的なコミュニケーション態度の育成
- (3) 小中教師が互いに学びあい、より良い指導方法を探求する体制作り

また、それまでのALT中心の指導から、学級担任による指導への、滑らかな導入を図るために、DVDの作成を行った。本発表では、カリキュラム作成の3年間の取り組みを中心に報告したい。

発表3 中学2年生はどれだけ辞書を引けるのか？

石井 聡裕（愛知教育大学大学院生）

本調査は2008年12月上旬、中学2年生（157名）を対象に、自作の辞書使用に関するアンケート用紙（関山2007などを参考）で実施した。

アンケートは3部構成とし、はじめに英語学習全体や辞書使用に関する習慣を尋ねた。その次に、紙辞書の一部分のコピーを配布して、どれだけ辞書の記述を調べることや理解ができているか小テストを行った。項目としては、辞書の見出し語や並びなどの構成に関すること、発音記号や文法説明など語法に関する質問を作成した。最後に辞書を利用する際にどのような点に注意しているか尋ねた。今回の発表では、誤答例の分析を中心に行い、中学生が苦手とする辞書使用法を明らかにしていきたい。

研究背景である学習指導要領の改訂において、辞書指導は「辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるようにすること」から「辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること」と記述された。これからの中学生に対する辞書指導において、どういった点に注意すべきなのか考察したい。

<第3室>

発表1 日本人英語学習者の単語認知における視覚と聴覚のギャップに関する予備的検討 天野 修一（名古屋大学大学院博士後期課程）

単語認知は音声言語理解における重要な要素のひとつである。たとえ語の意味や統語に関する知識を持っていても、その語を適切に認知できるとは限らない。したがって、音声単語認知は語の意味や統語に関する知識の習得とはまた別に検討される必要がある。しかし、外国語としての英語における音声単語認知の詳細な過程については、ほとんど明らかにされていない。

本研究では、日本人英語学習者の単語認知における視覚と聴覚のギャップはどのような語に見られるのか、言い換えると、読めばわかるのに、聴くとわからないのはどんな語か、を検証した。学習者に音声、文字の順に単語を提示し、それを和訳させ、その正答率と確信度のデータを分析した。その結果、刺激語の音節数、音素数、音韻の隣接語数などの要因と、単語認知における視覚と聴覚の差との間に相関があることがわかった。

発表2 英単語並び替え問題における学習者のマウス移動軌跡再現および履歴データ検索プログラムの構築

宮崎 佳典（静岡大学情報学部）

佐藤 良美（静岡大学情報学部4年）

厨子 光政（静岡大学情報学部）

法月 健（静岡産業大学情報学部）

近年、教育現場においてeラーニングシステムの導入が進み、学習時の状況などを履歴として残すことが可能となってきた。一方、取得した履歴情報の分析に関する研究はあまり進んでいない。本研究では英単語の並べ替え問題において、学習時のクリック情報のみならず、マウスの移動軌跡を再現することに成功し、さらにその軌跡情報を基にした検索／分析システムの構築を行っている。頻繁にマウスが移動したり、逆にほとんど動かなかったりと、学習者の動作には大きな個人差が存在するが、軌跡には様々な情報が内包されていると発表者は確信している。このような情報を有効活用すれば、正答や誤答に至るまでの有機的な英文の生成過程の諸相を、学習者の評価に加味できるかもしれない。例えば難易度の高い英単語や文構造に対し、学習者の理解度を“解答中の迷い”の度合いという指標と関連づけて計測化することも可能ではないか、と期待している。

発表3 イメージを通して考える英語イディオムの実践的授業
大橋 昌弥 (愛知県立明和高等学校)

英語イディオムの習得は日本人英語学習者にとって困難なものであり、ただ機械的な丸暗記作業に終始しがちであったが、イメージ化することでより効果的に理解できる学習法を検討した。隠喩や直喩を使う表現を中心に、色、動物、食べ物、数、身体部位、などに関連したもので教材を作成。英語母語話者による英語表現チェックを受けた後に学習者に提供した。高校生を対象に授業を実施した。教師がイメージ・スキーマを取り入れイディオムの由来、背景などを説明した場合と、そうしなかった場合とでは、学習効果に大きな違いが見られた。一定期間が経った後にテストを実施した際、意外な効果が表れた。また、類似した意味を表すイディオムで分類した場合と、そうしなかった場合とでも違った効果が得られた。

本研究では、イメージ・スキーマを取り入れた英語イディオムの実践的な授業の効果と今後の課題を発表したい。

<第4室>

発表1 外国語学習者のペアワーク研究におけるデータの分析単位
伊藤 隆 (名古屋学院大学)

本研究は、外国語学習者のペアワークを研究する際に、インタラクション・データの分析単位をどのように設定すべきかを、先行研究をもとに考察する文献研究である。学習者の言語産出を研究対象とするうえで、分析単位は大きな問題の1つである。先行研究では分析単位が様々であり、また類似の分析単位を使っているにもかかわらず定義が曖昧なものもあり、結果の比較や統合は容易ではない (Ellis, 2003)。分析単位を設定するには、研究者は研究目的との整合性を考慮することに加え、第2言語習得の定義づけを明確にする必要に迫られる。さらに、単なる言語産出ではなくペアワークの研究では、コミュニケーション方略や「意味の交渉 (negotiation of meaning)」など考慮すべき要素は増え、分析単位を設定するまでの道筋はさらに複雑になる。本研究は、この複雑な道筋を整理し、ペアワーク研究におけるデータの分析単位設定の指針について議論することを目指している。

発表2 音読中心の授業と文法訳読中心の授業が短期記憶に与える効果の比較
石神 政幸 (岐阜県立長良高等学校)

音読中心の授業を行っているA高校の1年生と文法訳読中心の授業を行っているB高校の1年生を対象に、コンピュータを用いた短期記憶のテストを実施した。テスト方法は、コンピュータから聞こえてくる英文をそのまま記憶し復唱するものである。その音声をコンピュータに録音し、音声ソフトを用いて、解答までの反応速度と正答率を計測した。その結果、音読中心の授業を行っているA高校のほうが、文法訳読中心のB高校より反応速度、正答率ともに優れた効果を得られることが判明した。今回の発表では、A高校とB高校の短期記憶問題の反応速度や正答率を比較するとともに、この実験で得られたデータから、A高校とB高校の生徒が復唱する際にどのような誤りを行っているかを比較分析してみたい。

